

はんしん@2020

写真・文 山田哲也

42

江戸時代初期、伊丹市鴻池地区で初めて清酒が造られた。これを後世に伝えるため、2000年11月、地元住民の手で、酒樽を三つ重ねた「清酒発祥の地・鴻池」のモニュメントが建てられた。

伊丹での清酒造りは、1578天代からあった製造法を改良し、双白澄酒の製法を発見して清酒が完成した。出来上がった清酒は樽廻船で江戸に運ばれ、将軍の御膳酒にも用達されたという。当時発行された「日本山海名産図会」で、「伊丹は日本上酒の始めとも言ふべし」と記されている。

清酒発祥の地・伊丹と鴻池家

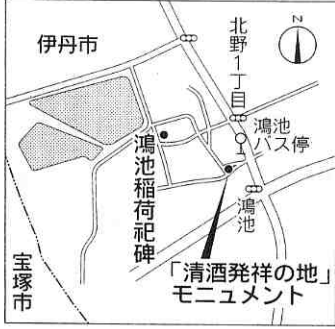
正6年、尼子氏の家臣・山中鹿之介の長男新六（鴻池家の始祖）が鴻池村に移り住み、酒造りをしたことから始まるとされる。

最初は濁り酒を造っていたが、1600（慶長5）年、新六の八男善右衛門（鴻池家初代当主）が室町時

代からあった製造法を改良し、双白澄酒の製法を発見して清酒が完成した。出来上がった清酒は樽廻船で江戸に運ばれ、将軍の御膳酒にも用達されたという。当時発行された「日本山海名産図会」で、「伊丹は日本上酒の始めとも言ふべし」と記されている。

伊丹酒は「丹釀」と称され、名声を博したが、江戸末期に西宮で宮水が発見されると、灘酒のグレードが上がった。江戸で販売のシェアを奪われ、明治時代にかけて西宮や灘に醸造の場が移った。現在、伊丹市内では小西酒造と老松酒造の2社を残すだけになった。

伊丹市バス・鴻池下車。



将軍の御膳酒にも用達



酒樽を三つ重ねた清酒発祥の地のモニュメント。北西約140mの児童公園には、鴻池家と酒造りの由来を記した「鴻池稲荷祀碑」(伊丹市文化財)がある。